

『揚鞭集』<sup>1</sup>序

半農の詩集がまもなく出版される。わたしは彼のために一篇の小序を書かざるを得ない。これは別にわたしが半農の詩を批評するとか、紹介するとかいうことではない。わたしは評論家でもないから、どうして批評などできよう、わたしの批評がまたどうして紹介になどなろう、半農の詩の好きは詩がそこにあることによって証される。これはわたしと半農との長い友情が、閑話を少し書いて、彼の詩集の序とせざるを得なくさせたのである。

わたしと半農とは『新青年』誌上で詩を書いた親友である。そうだ、我々も謬論を發し、馬鹿話をしたが、詩を書く興味だけは確かに弱くなかった。『新青年』には三日にあげず詩が載った。半農はヨーロッパに行ってからもしょっちゅう詩をよこして見せてくれた。その頃新詩を書いたものは実に少なくなかったが、わたしから見れば、遠慮なく言わせてもらおうと、たった二人しか詩人の天分がなかった。一人は尹黙で、一人が半農であった。尹黙は早くに新詩を書かなくなり、彼の詩情を別の形式に移して表現した。『秋明集』の詩詞が最もよい証拠である。尹黙は新興の口語と散文の格調が、彼の情調とあまりぴったりとは合わないと思つて、それで文言を使う方へと方向を変えた。だが彼は文言を制御できた、だから文言は彼の言うことを聞き、彼の詩詞はやはり現代の新詩であつて、彼の外側が普通の新詩と少し違うのは、思うに実は内包する気分が少し違うためにすぎないだろう。半農は十年來ひたすら新詩を書き、進境はとても明瞭だ。これは半農が口語を制御できているから、このように成功したので、だれでも『揚鞭集』を見るだけでその事実を知ることができる。天下に詩人は多い、大口をたたいて抑揚しようとは思わない。だがわたしの熟知する『新青年』時代の作家について言えば、上に述べたことはたいてい確實だと信じている。

新詩は要するに發展していくだろうと思う。中国の詩はいままで模倣の束縛があまりにもひどかった。当然激變が起こるのは免れない。自由と豪華は確かに新しい發展の上で重要な原素で、新詩の趨向はしたがって間違いなしとすることができる。わたしは伝統主義 (Traditionalism) の信徒ではないが、伝統の力は侮れないと信じる。悪い伝統思想は、自ずと多く、われわれはそれを除去する手立てを考えなければならない。善悪を超越ししかもまた排除すべからざる伝統も、また少なくはない。たとえば漢字によって生ずる様々な修辭方法などは、われわれが漢字を使つてもものを書くときにはどうしても脱しきれない。わたしは新詩の成績の上で一種の趨勢がとても重要だと思ふ、それは一種の融合化である。隠さずに本当のところを言うと、新詩も本来は模倣から來たもので、その進化は模倣と獨創の消長にある。近ごろ中国の詩は次第に獨創らしい形に近づいてきたようだが、これがわたしの言う融合化である。自由の中には自ずから節制があり、豪華の中には実に清潔な渋みが含まれる。中国文学の固有の特質が外来の影響によりますます美しくなり、羅紗の外套を羽織つただけでおしまいということにはできない。これはわたし個人の偏見かもしれないが、どうも芸術というもの是一種の奢侈品であるけれども、給付はいつも吝嗇であつて、少なくとも決して浪費ではないと思ふ。今までの新詩はおそらく少し浪費し過ぎであつて、わたしのような古い人間には——そうだ、わたしは自分が古い人間であつて、かなり

の中国の芸術及び思想上の伝統がわたしの心を占めていることを知っている、——どうやら、それほど満足には思われない。いま経験によって物を育てることの艱難を知ったが、これは文芸界の一つの進歩だと言わざるを得ない。

新詩の手法は、白描には感心しないし、またくだくだしい叙事も好きではないし、くだくだしい理屈は言うまでもない。わたしはただ抒情が詩の本分であるとしか認めない。そして写法はいわゆる“興”<sup>ii</sup>が最も面白いと思う。新しい名詞を使うなら象徴と言えるかもしれない。陳腐なことを言わせてもらうなら、象徴は詩の最も新しい写法であるが、また最も古く、中国にも“古已に之有り”である。上は『国風』を見、下は民謡を察すれば、中国の詩が多く興の体を用い、賦と比の体に比べてずっと普遍で成績もずっとよいことがわかる。たとえば「桃の夭夭たる」の詩は、必ずしも桃の実でもって新婦に比しているとは限らないうえ、また桃の花の開く時、あるいは桃を植えている家に嫁にゆく娘があるとも指定していない。実際は桃の花の濃艶な雰囲気と婚姻とがいささか共通のところがあるから、それでもって興を起こしたに過ぎない。だが興を起こしたというのは決して付けたりではなく、それこそ正当な意味を表明しているのであって、別の言い方をしただけのことである。中国の文学革命は古典主義（擬古主義ではない）の影響であって、すべての作品はみなガラスの玉のようで、手酷いまでにきらきらと澄み通っていて、いささかも朦朧としたところがない、したがってやはり一種の余香と後味に欠けているようだ。まっとうな道はおそらくやっぱりロマン主義だろう——だいたい詩はほとんどがロマン主義でないものではなく、そして象徴が実はその精華なのである。これは外国の新潮流であり、同時にまた中国の旧手法でもある。新詩がもしこの道を行くなら、融合してこそ成功し、真正の中国の新詩も生まれることができるだろう。

わたしは中国の新詩にたいしてかつて呐喊の旗を振ったことがある。だが自分では何の成績もなく、近年はすでに廃業し、もう筆を執ることはない。だが暇な時にはやはり思いついて、いささかの意見もあるので、この際に乗じて書いてみて、序文の材料とした。半農に指教を請う。

民国十五年五月三十日、北京にて。

※初出：1926年6月『語絲』第82期

<sup>i</sup> 『揚鞭集』上・中巻 北京北新書局1926年6月初版上巻に掲載。中巻1926年10月初版 下巻は未刊。『民国時期総書目』失収。

<sup>ii</sup> 賦比興 『詩経』における表現手法で、賦は直叙、比は比喻、興は古代社会の生活と関連の深い自然物との連想法による表現。「桃の夭夭たる」は『詩経』周南の「桃夭」の詩句。